



家法集

~ 5
5600



門へ5
號5600
卷



昔与のなめと青柳は雨と雲沖をふらふ
みまうたしく微風のおゆるらもたう
又姿情全うたう言ふも毎うたう
ま希くあひかき蕉翁の格言ありまをよ東
何れもま行まはしと人のま希くま
遠くまるとまもいれくまもま捧作雅言を吐く
正風とまのままうたうまのま雅言に

唯此好安に遊ぶの世に於ては心ゆくも
世をわたりて先づ心ゆくも心ゆくも
深情なく玄微の境に於ては肉を
何れも古き人今も論じざる
懐心のありては心ゆくも心ゆくも
家法と云ふ名も是れ由らざるは
すはる可からず

天保壬寅の冬

吾も此の氣のつくや
空の梅 此風

大いなるや
そらなるは

五

山住の子

山住

山住の安んずる

大不逆り利

人

の足ぬる

意

山住の安んずる

山住の安んずる

山住の安んずる

山住の安んずる

山住

山住の安んずる

山住

山住の安んずる

山住

山住の安んずる

みづ 指水
あまのり 常
あまのり 常
あまのり 常

はる 里
あまのり 常
あまのり 常
あまのり 常

あまのり 常
あまのり 常
あまのり 常
あまのり 常

あまのり 常
あまのり 常
あまのり 常
あまのり 常

白梅子秋好そ
其花
清香

云霞し水 花 蕊
うすしと 流 運 ち 希 也

悟青

白梅子秋好そ
其花
清香

竹乃清く多枝
其花
清香

五

后つて侍侍の
新法より礼心
養支

氏子之所かけり
うふの書
併足

えりや中へ地を
ゆかりの
ゆかりの
逸例

善子の十ちと名法
櫻堂
字来一睦月うね

公 玉 へ ち り ね へ
ま せ り し ち の 言 用

婿 せ へ

お へ へ

い し へ ち ち ね や
ま へ へ

い く へ と ち ち
い し へ ち ち ね や
ま へ へ

い し へ ち ち ね や
ま へ へ

わくわくおは 五
あはれ

ひらひらの花

ゆきやうぎ

あまのつゆ

湯

ふゆの 子

あはれ

あはれ

あはれ

くねてお城

やうかいぬよ鴨の音

鳩野

日
如月の湖

ゆかりのしるし

台々

中
まをさる

雨の道とぬいそ葉の群

澄吉

田家冬月

夜
まをさる

風
そよ

出来

あまのこころ
あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ

うき世のやたらり
未だうの存あり

羽人

ふらふらとゆく

うき世の存あり

市井

角田川

すつとゆく
あつぬ今も

あつぬ今も
あつぬ今も

月分

あゝ様さゝるんぬ
はくはくせんかゆまに雄

夕なわさるも

あゝさるも
あゝさるも

移りかゝるの目あゝ
あゝさるも
田

あゝさるも
あゝさるも
あゝさるも
仁里

皆去の聲を
かか—左の也
馬船

新しむるを
是れつる
敬請

舟を操る人
業を
目

舟を操る人
舟を操る人
舟を操る人

好むにふくなく 枕を
いかにせむとさす

明方おせしむ
向藤原

きりくきりく 房の玉

晴
きりくきりく 房の玉

きりくきりく 房の玉
詞天

人のきりくきりく 房の玉

晴
きりくきりく 房の玉

小田原のこゝろ

萬葉集のこゝろ

二子山 新井村

月と星の光

あひらけの光

雲のくもる光
おきく
新井村

一と星の光
あひらけの光
之桂

百五十一

子孫

持子ありては

和厚なり

夕ふあゝそあ

うゝあゝあゝ

い
何ぬゝ
増
木
良

風
角馬
六

和歌山にあり

近江

釣江

はう利木をるかひる

起きしと用らるる

物や浮かくる
木着

きほ風を

水佳

水にて出るや

描の事

薫りかたし

強り枯れくさ

暮山

夢や秋深葉

一ひる

洪くさくさ

さくや茶つ松

あまのこ
中書

猫ねこ中ちゆう書しよ

あまのこ

いりりいりり見入

池乃鴨 壺天

香かほ木きうう高たかの 三さん木

おあおあるる子こささ又

あまのこ

言生ノ心ノ結生

一欠ノ首書ノ心

華子ノ心ノ心

壺ノ心ノ心

心流

心ノ心ノ心

心ノ心ノ心

心ノ心ノ心

心ノ心ノ心

見おろしそ 苺の花をき

峠の那

苺菜女

げらるそまの二丁
の月えり水
くらん

梅の音よ 風行は

およひ梅

女
おのゑ

止るのさし 堤貝

あはれや 梅の雨

上下の横へしとまや

差合のしるし

徳丸

をいふ解く 差合

存く竹くえの心

刻くゆきを 後書

系れ減く

あうり色

細子のうし 法にさや

細く印のち

風を擧

あまのこゝろをいふ
るをいふ

あまのこゝろをいふ
るをいふ
あまのこゝろをいふ
るをいふ

月乃の
涼松

親のえい
英父
牡丹の
船

由若の香の隣子

あはれい六清より

謹剛

月と花と

杉登

かきく

アアウチ

管の

秋桐華甘

あはれい

あはれい音可好

あはれい隔ち

あはれい初雨

あはれい

今掛て見し事高し

あさね

山

小金井

君う付やみ洞も

かきあのおと

押心子長

種うし

佛

海

うき

鏡のまはるゝ

中世新編

巻

撮

之の通

李校

道はもたらさる

うたはれぬの初夢
あまのこころ
不意

中世新編
巻
成色

芽生えかゝる風の世扇
のほくほく芒の如

一可た名の御も
せしおぬ本子子
那生

海へ
あささのちのち
松

常盤木通
あささのちのち
ちる系か

あけし

月の夜を
照らす

三言
月意

あけし
あけし
あけし
あけし

あけし

あけし

三十一

鳳歌

諸邦聞書

月さぬをたむ成おそくし初梅 三十一 梅室

花の香やあはゆる鳥の都ぬら 三十二 岱年

雪の中ふいづきを出るさき 三十三 九起

三月月や梅子さく清梅の出る 三十四 杜鵑

吹きよも風雄の埃や福まき 三十五 柳絲

池水に浪あふる雉子のさる音 三十六 岳鳳

さく日影やふりぬる花消えぬ庭 三十七 浪叟

くね嘆や 船に聞の川さく 三十八 白鷗

雪か揺るさく心は 冬岐

穉子守赤みても 那唐辛子 祇白

月のかき 赤梅 三十九 曾爰

おき浪お覚るさく山のか 四十 平山

小ぬくいとさく不説し花 四十一 雪頂

積るけや消るさく 峰九 四十二

花のちよあも 日さす 宇逸 四十三

淨一草やうの間のるは 瑞草を
 蓮塘に流るるかきぬきし様
 思ふらむもあ堵きむ時を
 ぬき川に流るるもや蓮の葉
 戸の明もあ川あけゆる麻子
 土ぬ日おりにけりあつもの山
 門遠くたふちもぬ 流るる
 りあ草にみちるる水野に出る

雨堂

石舟

鳥仁

巾凡

真々

双鳥

駒童

悠々

常におする本さへ〜小教へ
 我の本もあ海やちか 威り
 蓮葉にす〜あさき〜道子所
 りあち〜あ〜あ〜あ〜あ
 ちるもの〜あ〜あ〜あ〜あ
 家屋にすあああ〜あ〜あ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

十序

序月

路方

素亭

器推

紫人

葵笠

映門

浪しけし神や雨後のみや常の
 於夕に外にけりや一河豚汁
 夢さすよきし形や夢のしをた鹿
 けりよきし夢たるや門の梅見か
 夢外たやうに鳴みうらむの草
 核もわくや心やんもの烟の形
 あかきよきし底のなげや五月の
 ちかきよきし物入きし 嘆いさうれ花

サヌキ
アハ
アハ
アハ
アハ
アハ
アハ
アハ

茂 推
 今 是
 嘯 露
 應 吏
 兼 葉
 有 句
 帆 下
 虚 白

川原中 寒のけしきもあつた空
 なごきよきし夢さすよきし 夢の
 彩 甲の半分出身し 沙干き
 夢さすよきし 夢さすよきし 夢さすよきし
 吹さすよきし 夢さすよきし 夢さすよきし
 蓄さすよきし 夢さすよきし 夢さすよきし
 積りれし 夢さすよきし 夢さすよきし
 古堤形も 夢さすよきし 夢さすよきし

イセ
ヲリ
ミカハ

菴 叟
 雲 石
 流 芳
 黄 山
 而 后
 桃 鳥
 卓 池
 流 芝

色はくえ出の里中を船の裏
 一七のうらみも日暮る様うね
 すはあき出水のあや赤崎
 燃るあゝ家も中船のうらみ
 柳のきふありひするや海の上
 七夕の羊にあまるか子船小袖
 船室の中曲窓の下に横のうね
 杉に想をよけし海をぬまのうね

エニミウ 水舟
スルカ 旦松
カヒ 陣山
 二原
 楳嶺
サカミ 馬塚
 立宇

心はくえ出の川を舟赤らん不
 無常の舟をくさぬ日水舟
 追はけえ玉たるもあやう
 神はの舟く舟をひや船小雲
 船室の中舟に人さし船のうね
 志く舟をくさぬや夜舟のうね
 建つれは海をぬまのうね

ムサシ 丹舟
 白冷
 對笠
 如々
 陣風
ムサシ 太良

色はくえ出の里中を船の裏
 一七のうらみも日暮る様うね
 すはあき出水のあや赤崎
 燃るあゝ家も中船のうらみ
 柳のきふありひするや海の上
 七夕の羊にあまるか子船小袖
 船室の中曲窓の下に横のうね
 杉に想をよけし海をぬまのうね

小家をほくしに深き夕日うつら
 溜つふら鳥居又あらずと水舟
 今も舟も静も言似ず常記
 蓬萊にあけく膝をひら角力ら
 静の美能あつて斗や人を引る
 用もたふ心をほくする清水舟
 妙水 日み毎日あつてさあつて
 今も舟も静も言似ず常記
 蓬萊にあけく膝をひら角力ら

錦枝女

逸山

柴遊

素元

橋水

玄秋

妙の女

江月

下

上

房

ヒタチ

古き方り通里院より草舟を
 暮るるかきとや花の結を
 松も音のあつてり寒の入
 谷間や一しきの返す維子み
 枯くは葉みめくたやあつる菊
 花の根よやも植はく心回の家
 さつる静くもの言言とけし
 下り道も見えぬ谷間の青田や

知風

茂綾

菁莪

太朗

毒玄

千骨

花酔

耕

来る月の見えそ待する志はぬが 下毛 其翼
 是にきく候はるや夕子の花 塵を
 空に香も花も志のみを天の河 岸有
 かん鳥啼や馬も夕をぬ道 上毛 水
 やまこと花も夕を無月おの 沙来
 入野も蝶も来る夕を座をが ヲク 心阿
 のみまより眼の夕をあかき チハ 尊阿
 酒みかより夕をいそぬ杯 チハ 御凡

蝶しや来て来る人誘ひ出す 化鵬
 夕をぬき口には夕を肥る座の子 エキコ 魚都里
 亦し夕をみれ夕を待る月と梅 大恒
 やし夕を湯を度すや夕を編裁 薑琴
 寒い月を夕を梅の夕を 三十ノ 樵真
 松の隙を夕を夕を 三十ノ 桂徑
 井戸端を夕を夕を賈に 七年 若人
 夕之替を松の夕を 七年 茶外

吾人のあはれ

あはれあはれ

月の夜のあはれ

あはれあはれ

由

